

課題は、源之助にとつて、資本制下における「下層社会」の日常生活から経済社会をうとうとしてみようちえなかつた挫折感をどのように再構築するかにあつたのだと思われる。このことは、現実的には、つぎのような源之助の軌跡に照応している。すなわち、源之助は、日清戦争後から日露戦争前まで社会的意識を昂揚させて実践的であつたとし、またそうでありえたのであるが、日露戦争後社会的意識を實踐のみならず思想的にも衰弱させざるをえなかつたというような軌跡にある。このような軌跡は、すぐには、当時の社会情況において、一般化できないかもしれない。しかし、源之助における現実意識と社会的意識との分裂を一指標として、当時の社会思想の問題点を明らかにすることができるとすれば、源之助の史的意義はより深く問うことができると思われる。

「横山源之助とは、いったい何者であつたらう。

この問いは、ようやく評伝を書き終わりたいまなのおこる。」と著者が本書「あとがき」に記しているように、源之助はまだまだ問われるべき人物である。

(A5判 二七八頁 一九七九年四月
創樹社 三五〇〇円)
(立川健治 京都大学大学院生)

Canfield F. Smith

*Volinistok under Red and
White Rule—Revolution
and Counterrevolution
in the Russian Far East
1920-1922*

シベリア戦争(いわゆるシベリア出兵)

の研究は最近になつてようやく本格化した(詳しくは原陣之「日本の極東ロシア軍事干渉の諸問題」『歴史学研究』四七八号参照)。しかしながら、尼港事件から日本軍撤退に至る時期については、信夫清三郎『大正政治史』に概略があるものの、詳細な研究はほとんどなされていらない。その意味で本書は、この時期のシベリアにおける革命及びそれに対する日本軍の対応を知るうえで有益であらう。

本書は七つの章とエピソードから成り、ウラディヴォストークにおける政変を軸にしてシベリアにおける革命の進行を詳細に叙述している。その政変の過程で成立し崩

壊していった各政権の実態を知ることがこの時期を理解するのに重要だからである。またこの過程における日本軍の動向にも注意している。

第一章は、オムスクのボルチャク政権崩壊からウラディヴォストークのロザノフ白色政権の崩壊(一九二〇年一月三十一日)までを扱う。第二章では、臨時ゼムストヴォ政府の成立と、日本軍による政府軍の武装解除の強行(四月四日)までの過程を述べる。第三章では、東部シベリア統一における臨時ゼムストヴォ政府の役割を扱う。なお、二〇年四月にウエルフネウディンスクで極東共和国が成立したこと、十一月にセミノフがチタから撤退したことは、この時期において注目すべき事件であつた。第四章では、二一年五月のメルクロフによるクーデター並びに臨時プリアムール(沿黒龍江)政府の成立について論じる。この反革命の背景には、日本軍の駐屯継続、白軍の沿海州集結、ロシアの政治情勢の流動化があつた。第五章はメルクロフ政権の失政を述べ、第六章では、白軍による冬季攻勢の開始とその敗北がメルクロフ政権に打撃となつたこと、そして第七章では、日本軍

のシベリア撤退と最後の白色政権崩壊の次第を述べる。エピソードでは、コルチャク政権崩壊後になおシベリア革命の進行を妨げたものは、シベリアにおけるボルシェヴィキ支持の弱さ、白軍の東方移動並びに日本軍の単独駐兵継続であったとする。

なお本書は Publications on Russia and Eastern Europe of the Institute for Comparative and Foreign Area Studies シリーズの一冊として刊行された。ただ、ロシア語文献資料の表記は全てラテン文字に翻字されている。また、本書では日本側の文献資料は使われていないが、日本軍のシベリア撤退過程の追究は、日本史研究者の側の課題でもあろう。

(三〇四頁 一九七五年 Seattle and London, University of Washington Press)
 (松延秀一 京都大学大学院生)

受贈図書

(一九七九年十月十五日～十二月十日)
 中国史研究(中国社会科学学院) 一九七九年

三期

神道宗教(国学院大学神道宗教学会) 九

五・九六

産業社会論集(立命館大学) 二二

人文自然科学論集(東京経済大学) 五一

大津市史 二卷

信濃(信濃史学会) 三一—一〇

経済経営論集(竜谷大学経済・経営学会)

一九—二

経済論叢(京都大学経済学会) 一二三—

六

国家学会雑誌(東京大学法学部) 九二—

九・一〇

人類学雑誌(日本人類学会) 八七—三

文明(東海大学文明研究所) 二七

準人文化(準人文化研究所) 六

神道学(出雲大社神道学会) 一〇三

湘南史学(東海大学大学院日本史学友会)

四

社会科学論集(大阪府立大学社会科学学研究会)

一〇

岡田章雄著 動物(日本史小百科、近藤出版社)

民族研究(北京民族研究所) 一九七九年一

期

G・W・スキナー著 今井清一ほか訳 中

国農村の市場・社会構造(法律文化社)

竜谷史壇(竜谷大学史学会) 七七

経済論究(九州大学大学院経済学会) 四

六

竜谷大学論集(竜谷学会) 四一—五

鹿兒島経大論集(鹿兒島経科大学会) 二〇

—三

歴史学報(韓国歴史学会) 八三

考古学報(中国社会科学院考古研究所)

一九七九年四期

東洋学文献類目(京大人文学科研究所)

一九七九年度

駿台史学(明治大学駿台史学会) 四七

桐明学報(桐明高等学校) 二九

人文論叢(福岡大学研究所) 一一—二

神道史研究(八坂神社神道史学会) 二七

—四

西洋史論叢(早稲田大学史学会西洋史部)

会) 一

韓国史研究叢報(韓国国史編纂委員会)

二五

奈良国立文化財研究所年報 一九七九年度